

CHUOH TRY+ANGLE

知っ得通信

2008年6月20日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2-15-5 <http://www.chuoh-kyouiku.co.jp/>



感情の論理 vol.16 「共鳴の法則」

人の感情の動きには様々な法則があります。今回はその中の一つ、「共鳴の法則」について「夏期講習の案内」を例にお話しましょう。

ほとんどの塾は既に夏期講習の案内・チラシを作成済みだと思います。それと比較して勉強してみてください。また、これから配布する塾(案内が出遅れた塾)にとっては参考になると思います。

どうして特訓コースなるものが恒例になってしまったのだろう。それは、君たちの先輩が望んだからだ。

「もっと勉強がしたい…」

その思いに応じて開講した昨年の「特訓コース」は15名が参加。毎日、朝の9時から5時まで教室で学習した。冬期は塾生の希望で、とうとう1日12時間の「超特訓コース」にまで発展してしまった。しかし、彼らは見事にやり遂げた。

参加者の2つ下の妹が言った。

「お兄ちゃんがこんなに勉強するようになるとは思わなかった」

本人も言っている。

「自分がこんなに勉強するようになるとは思わなかった」

母親も言った。

「息子は変わった」

そう、人は変わるのだ。

何か問題が起こると「知育偏重」だの「学力優先」だのと勉強に対する批判が強くなるが、それは間違っている。スポーツにせよ、芸術にせよ、たとえそれが勉強でも、一つのことに真剣に取り組む人が、成長こそすれ、曲がってしまうなどということは有り得ない。

事実、君たちの先輩は真っ直ぐに成長している。彼らは少しのことでは負けない逞しい精神力を身に付けた。そして、もちろん、精一杯の学力を身に付けたことは言うまでもない。

人は変わる。

40日間という時間は無駄に過ごせばあっという間だが、何かを成すには十分な時間だ。高校受験は君が変わるために与えられたチャンスだ。残された半年を駆け抜けるための力を○○学園の集中特訓講座で手にしてみないか。受講終了後、君たちが得るのは「学習意欲」という名の最強アイテムだ。それさえ獲得できれば怖いものは何もない。

君たちは受験のために勉強するのではない。勉強するために「受験」はあるのだ!

これは、私が塾経営をしていた頃(7~8年前)、74,000円で実施した夏期特訓講座の案内文冒頭です。定員15名は2日で満席になりました。(ちなみに、この講座は個別指導ではなく、自立学習で、講師一人が監督していました。)熱いでしょ。「あなた」が熱くならないと、相手が熱くなってくれるはずがありません。人のエネルギーは増幅して伝播します。これが「共鳴の法則」です。

だからといってこのままの文章が、あなたの塾で通用するわけではありません。私のキャラとあなたのキャラは違うのですから。あなたの「熱意」を伝えることが大切なのです。

また、文中どこにも「当塾は(私は)~します」という具体的なお約束(例:偏差値を10上げる)をしていません。それどころか、「当塾は」という主語を一切使わず、「他者」(例:君たちは)を主語としていることに注目して下さい。ところが多くの塾が次のような「案内」を作っています。

中学3年生の皆さんにとって、夏休みは自分との闘いです。

この40日間という期間をいかに過ごすかによって、皆さんの進路が決まると言っても過言ではないでしょう。悔いのない中学生を送るために、最後まで諦めない努力を期待します。

当塾では「ひとりひとりのために」を指導理念に、夏期講習を以下の要領で行います。今回の特別講習では弱点を補強すると共に実践的な学力を身につけることを主眼におきます。

受講希望者は申し込み用紙に必要事項を記入して、7月19日(土)までにご提出ください。(以下略)

以前、コピーライティングの例文として提示した「味も素っ気もない文章」です。これでは積極的に講習に参加しようという意欲を引き出すのは無理です。また、この案内を読んだときの母親の気持ちは確実に次のようになっています。

「ああ、またお金が掛かる…」

本当に多くの塾が、読者にネガティブな感情を想起させる案内文を作っています。ぜひ、あなたの熱い思いを伝えて下さい。「思い」は伝えなければ伝わらないのです。

今月の気になるハナシ

小中校統廃合と小規模校の取り組み

公立小中学校のこれ以上の小規模化を防ぐために、文科省は、統廃合促進の方針を固めました。中教審から異論が出なければ、35年ぶりの基準見直しとなります。

1. 減り続ける小中学生

学校統廃合をめぐるのは、かつて無理な統廃合の促進によって、地域間の対立や通学に困ることも増えました。そのため、小規模校も容認するとして通知を1973年に出し、文科省は、立場を事実上修正しています。学校統廃合を促進させたのも、小規模校を容認させたのも、少子化が引き金となっています。

皆さんご存知のように、現在も小中学生の数は減り続けています。事実、公立校に通う小中学生は、80年代のころから比べると約4割減となっています。一方で、公立の学校数は、1割減にもなっていません。このため1校あたりの学級数は、減少気味です。当然、少子化の加速する今後、小規模校の増加が見込まれます。

そんな例に漏れず、小規模校への道を歩んでいる学校があります。ここでは小規模校だからできる挑戦が進められています。

2. 小1から英語教育を

長崎県五島市奈留小中学校の「イングリッシュルーム」には、同じ敷地内にある県立奈留高校から、外国語指導助手(ALT)のアメリカ人講師がやって来ます。小4の授業では、発音の聞き取りや、英語を使ってゲームをしたりと英語に慣れ親むさまざまな取り組みが行われています。

教室中を動き回る生徒を見ながら、「英語が嫌いだったから、小学校の教師になったのに」と、担任の教師は苦笑い。ですが、笑ってばかりもいられないようです。

なぜなら、ここ奈留小中学校では、小1から英語の授業が実施されているからです。小5、6になると、中学校の英語教師も加わり3人体制になり、授業の進行も中学教師がつとめています。

3. 小中高一貫教育へ

五島列島の奈留島は06年、公立では全国初の「小中高一貫教育特区」に認定されました。01年に中高一貫教育を取り入れたのが始まりで、

今年4月に奈留小が奈留中に校舎移転したことで、小中高一貫教育が本格的に始動しました。小1から高3まで総勢281人という少なさを逆手にとって、小学英語以外にもさまざまな工夫をこらしています。小中高の12年を、前期・中期・後期と4・3・5年でわけ、小5、6では一部に教科担任制を導入しています。

小規模校では教師の人数も少なく、専門外の教科を担当することが多くなりがちですが、奈留島では、小中高の教師が相互乗り入れすることで、各教科の専任教師によるプロの指導を可能としています。

学校行事も、教育のひとつとして一緒に取り組んでいます。遠足では、高校の生徒会が仕切り、小中高の全員が参加できるゲームなどを実施して、各学年の生徒から好評を得ています。

4. 少子化・過疎化対策としての一貫化と課題

一貫化は、少子化・過疎化対策としての大きな意味もあります。奈留高校1年生は、「ずっと一緒なので、友達以上、兄弟みたい。けんかしてもすぐ仲直りするし、いじめもない」と話しています。

一方で、小1から高2までずっと単学級が続くので、新しい仲間が増えることもほとんどなく、自分の能力を早くから見切ってしまうがちになるのではないかと、という懸念もあります。そのため奈留小中学校の山下校長は、「意欲をどうやって持たせるのか。(先輩後輩の)交流を増やし、刺激を与えたい」と話しています。

奈留高校は、面接とレポートが入試代わり。事実上、全員が進学できるため、生徒間の学力差が大きいのも事実です。そこで高2では、進路別に4コースに生徒を分け、違う教科をきめ細かく教える方法を取っています。奈留高校の溜(たまる)校長は、どの子にも興味深く、力がつく授業をやるのは大変だが、さまざまな生徒たちにあった進路を確実にみつけ、島から旅立たせたい」と話しています。

[奈留島]

五島列島で一番大きい福江島と2番目の中通島のちょうど中間にある島。島全体が奈留町という町であったが、平成16年8月に福江島、久賀島の市町と合併して五島市に。